

# 「余は如何にして大学院生となりしか」

—アンケート・若き歴史研究者の実態に迫る?—

はじめに

20世紀後半以来歴史学においては学際的研究の名のもとに、多くの研究者を動員し、隣接諸科学分野との緊密な協力やコンピューター等の先端機器を駆使しての共同研究の方法が新たに開拓され、研究のあり方も様変わりしつつあるようです。しかしながら、現在に至ってもこのような研究のあり方はなお例外的であって、一般的には研究者個人を主体とし、各人がそれぞれの道具や技術に磨きをかけた職人芸的な研究が多くを占めていることもまた事実です。以上のような現状を反映してか、大学院生の研究生活も個人レベルで完結しがちであり、「同行の士」たる他の院生のことはうすうす気にはなるけど、案外お互いのことは深くは知らないで済ましているのではないのでしょうか。

「そんなことはどうでもいい」という方もいることでしょう。また「自分のことを人にとやかく言われたくない」と思っている方もいるかも知れません。しかし『クリオ』第7号編集部では、「とやかくは言わないけれど、あれこれと聞いてみたい」との強い思いに駆られ、唐突なことや皆さんの困惑は承知の上で歴史学系の大学院生の方々に対し、歴史学を志した契機、日頃の研究活動、さらには生活全般に関するアンケートを実施し、集計結果をもとに院生の実像を把握しようという企画を立てた次第です。幸い多くの方々の御理解・御協力をいただき十分なサンプルを集めることができました。

ここで編集部が設定したアンケートの質問項目を以下に掲げてみると…

## 1. 研究者を志し、専攻を決定するに至る経緯に関して

歴史（学）に関心を持たれたのはいつですか？ また、そのきっかけとなったことが何かあれば教えてください。

あなたが現在所属している専門の学科（日本史、東洋史 etc.）を選ばれたのいつ頃ですか？ また、その理由はなんですか？

あなたが現在専門として研究している時代・地域（e.g. ギリシア古代）を選んだのはいつ頃ですか？ また、その理由はなんですか？

あなたが大学院進学を志望したいつ頃ですか？ また、それは何故ですか？

これまでの研究生活の中で特に感銘（印象）を受けた書物・講義などがあれば教えてください。

## 2. あなたの現在の研究活動に関して

あなたの現在の研究テーマは何ですか？ また、テーマを選んだ結果をどう感じていますか？

現在研究を行なう上で抱えている問題を教えてください。（e.g. 史料の入手、分析）

あなたの個人的な研究活動と授業とのかね合いについてどう感じていますか？

あなたが現在専門としている分野以外で関心のある分野があれば教えてください。

（時代・地域、歴史以外の他の学問分野ならどういった分野か、などなるべく具体的に）

## 3. 生活全般に関して

あなたは現在どのようにして生計を立てていますか？（アルバイトの頻度・内容、実家などからの援助、奨学金などに関してなるべく具体的に教えてください。）

あなたの支出に占める研究関連費のウェイトはどのくらいですか？（なるべく具体的に教えてください。）

あなたの現在の（大学院生としての研究）生活に対する周囲の理解（反応）はどうですか？（e.g. 両親の態度）

今後の就職の見通しに関して何かあれば教えてください。（あなた個人としてだけでなく、所属学科としての就職状況などに関しても教えてください。）

院生間の交流の状況、およびその範囲について教えてください。（学科内、学科間、学部・大学間などに関してなるべく具体的にお願いします。）

以上のように、質問事項はやや抽象的でもあり、質問の表現にも誤解を招きかねないものがないとは言えません。しかしこちらである程度の選択肢を設定せずにあえてこのような質問形式にしたのは、できるだけアンケートにお答え頂いた皆さんの「ナマの声」を拾い上げ、実情を生き生きと把握したいという編集部の方針によるものです。また、このようなアンケートでは集計にあたっては客観的数量化が難しいというデメリットもありますが、そこは多少乱暴ながら、ある程度こちらの主観をもとに数量化せざるを得ませんでした。こうして各項目ごとに数量化された集計結果から得られた傾向や編集部の主観的な感想を、簡単にコメントするという手順でまとめたのが以下の部分です。これを読んで、皆さんはどのような感想をお持ちになるでしょうか？

\* \* \*

#### <集計結果ならびに寸評>

ご協力いただいた大学院生の方々 総数 60名（9大学）

（内訳）

西洋史研究者	42人
日本史研究者	14人
その他・分野不明	4人

< 計 >

< 内訳 >

（西洋史） （西洋史以外）

#### 1 歴史学関連の研究に取り組むに至る経緯に関する諸項目

### ① 関心を抱いた時期

#### 大学以前

幼少期・小学校時代	2 2	1 4	8
中学生時代	6	4	2
高校生時代	1 4	1 0	4

#### 大学以降

1・2年生	5	4	1
3・4年生	6	4	2
大学院進学以後	3	2	1
その他・不明	3	0	3

皆さん大分早くから歴史に目覚めたんですね。きっかけはやはり本やTV（例えば、大河ドラマ『国盗り物語』）というパターンが目立ちました。また「近所で発掘しているのを見て」など、考古学的興味がきっかけになったという人もいます。ほかには高校や予備校の授業が面白かったので、という人もチラホラと見かけました。

### ② 学科選択の時期

大学以前	1 6	1 1	5
大学1・2年	2 0	1 6	4
大学3・4年	1 6	9	7
それ以降（社会人時代）	1	0	1
不明	6	3	3

大学入学以前から、という気の早い人が結構います。教養課程で決めたという人が最も多かったのですが、その中には「進学振り分けで偶然学科が決まった」など、学科選択を迫られてという場合もあるようです。日本史の人の中には学問の実証的性格にひかれて選択したという回答も見かけました。あと詳しいことは不明ですが、「あの頃の僕にとって西洋はまぶしかった」という面白い回答もありました。

### ③専門選択の時期

大学以前	5	4	1
大学1・2年	11	5	6
大学3・4年	32	23	9
大学院	5	4	1
不明	4	3	1

ここでは専門課程で、という人が圧倒的に多いですね。中でも卒論を書く段になってテーマを絞らねば、ということで選んだパターンが多いようです。やはり卒論というのは重い意味を持っているのでしょうか。また、大学院に入ってから現在の専攻テーマを決めた人が少なからずいたのも新鮮でした。ほかにも「ゼミの内容がきっかけ」とか「先生のすすめで」などの理由もありました。

### ④大学院進学決心の時期

大学以前	9	7	2
大学1・2年	6	4	2
大学3・4年	38	24	14
社会人	3	2	1
不明	3	2	1

院進を決心したのは早い時期からという人はあまり多くありませんが、これは皆さん進路の選択に悩んだということでしょうか。予想通り、もっと勉強を続けたいという人や普通に社会に出ることに対する不安や不満を理由にあげた人が結構多かったです。また中には「女性向きの仕事だと思った」という人もいましたが、やはり現代社会におけるジェンダーの問題は進路選択に重くのしかかっているようです。

## 2 現在の研究活動に関する諸項目

### ①現在の研究テーマに対する満足・不満足

満足	27	19	8
不満足	8	6	2

ここで「不満足」としたのはあくまでも類型化する上でのこちらの都合です。それらの人の回答の内容は研究を進めていく上での大変さを指摘しているのが大半で、本当の意味で不満を感じている人はほとんどいないと思われますが、中には「しまった」と思いつつも「今更（テーマを）変えられない」というニュアンスの回答もいくつか見られました。結論としては、ほとんどの人が自分の選んだテーマになにがしかのやりがいを感じつつ研究に進んでいる、といったところでしょうか。

### ②研究上の困難

史料入手が困難	20	16	4
語学（含・古文書読解）	10	9	1
お金が足りない	7	6	1
方法論上の問題	6	3	3

自分の力量に悲観的	6	4	27
バイト等で忙しく勉強時間が 少なくなってしまう	5	2	3
史料が少ない	5	5	10
先行研究が少ない	2	2	0
独自性の提起	3	2	1
良い指導者が得られない	1	1	0
先行研究が多すぎる (フォローが大変)	1	0	1

予想通りというべきか、史料関連の困難を挙げる人が多数を占めました。特に西洋史系の場合史料の大半は外国にあるためより問題が深刻のようです。対照的なのは、西洋史系の人の中ではかなりの人が語学力の問題を挙げているのに対し、非西洋史系の人にはむしろ方法論上の問題を指摘していることです。他方経済的問題については思ったほど多くはなかったのですが、これはあまりにも自明のことで指摘するまでもない、と解釈すべきなのでしょうか。

### ③授業とのかね合いについて

有益・必要	18	14	4
(時に)重荷	12	9	3
自分のテーマと直接は関係な い	9	9	0
予習をさぼる・あまり出ない・ 自分で判断・無視	6	2	4
特に問題ない	7	3	4

個別研究の発表なので目安と なる	2	0	2
つらいがそういうもの	1	0	1
日程的にきつい(授業・ゼミ 固まらない)	1	0	1

授業の重要性を感じている人が多い反面、ある程度の負担を感じている人や授業にそれ程重きを置いていない人も結構いるようです。また自らの研究テーマと授業内容との関連性の希薄さに不満を感じている人が案外多いようです。結論としては「授業は自分のテーマとあまり関係ないし負担ではあるが、いろいろ吸収すれば将来生きてくる」というのが最大公約数的意見でしょうか。

#### ④専門以外の関心

周辺諸科学	22	13	9
他地域同テーマ	15	11	4
同地域他時代	5	1	4
方法論上の刺激を求めて	4	2	2
語学として	1	1	0
関係不明	18	13	5

最近の研究活動もインターディシプリナリーになってきつつあるようで、周辺諸科学に関心のある人がかなり多いようです。歴史学の枠内での関心のベクトルは、西洋史系の人と同時代の地域比較に向かっているのに対し、日本史系では日本史の中での別の時代に向かっているという興味深い結果が出ました。また中には天文学など研究テーマとの関連性を図りかねるようなことに関心のある人が結構いたのですが、これは皆さんの知的関心



の広さの表れなのでしょうか。

### 3 生活全般に関する諸項目

#### ①生計に関して

アルバイト等による

自力救済型	24	18	6
-------	----	----	---

実家の援助・奨学金等による

他力?型	18	10	8
------	----	----	---

中間型	16	10	6
-----	----	----	---

結果を見る限り院生の経済的自立は相当困難のようで、奨学金や親の援助にある程度依存せざるを得ない場合がかなり多いようです。数字を見る限りではありますが、西洋史系の人の中で自力救済型の割合が比較的高いのは何故でしょうか？

#### ②支出に占める研究関連費

※ %表記(含・割合表記)による答え

10%台	6	6	0
------	---	---	---

20%台	9	4	5
------	---	---	---

30%台	6	4	2
------	---	---	---

40%台	2	1	1
------	---	---	---

50%台	9	6	3
------	---	---	---

60%台	3	0	3
------	---	---	---

※金額表記による答え

1万円台	4	4	0
------	---	---	---

2万円台	6	4	2
3万円台	1	1	0
4万円台	0	0	0
5万円台	2	1	1

②

\*その他、0～200%まで時によって変動するとの回答もあり

\*50～60%との回答はいずれも自宅生

自宅の人とそうでない人では条件が違うため一概には言えませんが、書籍代を中心とする研究関連費の占めるウェイトは支出の20～30%と、決して小さくはないようです。文系の研究者の場合ある程度は研究活動を私費で賄わなければならない状況が浮き彫りになっていると言えるでしょう。中には「歴史より三度のメシが好き(?!)」という人もいましたが、気持ちはよ～くわかります。

### ③ 周囲の理解

好意的	31	19	12
反対・理解なし	17	12	5
無関心・わかっていない			
エイリアン?扱い	16	12	4

意外にも、周囲の反応は好意的という人が結構多い、という印象を受けました。とりわけ皆さん両親からはよく理解されているという感じです。しかし中には「会社を辞めて院進したら養子に出された(?!)」という深刻な(??)場合もあるようです。また女性の場合男性よりも周囲の理解を得るのははるかに困難なようで、ここにもジェンダーの問題が表れていると言えるでしょう。

④就職に関して

明（多少とも）	7	5	2
暗	3 5	2 3	1 2

これに関してはやはり状況は非常に厳しいようで、回答にあった「五里霧中」や「それは言わない約束でしょ!」といった言葉が全てを象徴しています。さらに最近の大学制度の改編などが不安に拍車をかけているようです。研究職以外の職に多少の光明を見出している例もありますが、先行きはまさに「イバラの道」といったところでしょうか。

⑤院生間の交流

全くない	4	3	1
ある			

専門分野に関して

学科内のみ	1 6	9	7
学科内+他大学・研究会	3 1	2 2	9

他分野との交流に関して

交流なし（専門内に閉じている）	2 0	1 3	7
交流あり	2 0	1 4	6

歴史学の内部では研究会などを通じて院生の幅広い交流が行われているようで、孤立した研究生活というイメージはほとんどありません。また歴史学系以外との交流という点では約半数が交流有りと答えていますがその内実は不明で、真の意味での学際的交流が実現しているとは言い難いようです。

\*

\*

\*

おわりに <総括と反省>

今回私たち『クリオ』第7号編集部が行ったアンケートに関する集計及び項目ごとの集計結果に対する寸評は上記の通りです。個々の項目については予想通りとも言える回答がある一方でちょっと意外に思えるような答えも見られ、回答してくださった方によって質問の受け取り方も含めて本当にさまざまでした。これらをまとめて何がしかのことを言うのはなかなか困難ですが、最後にここで集計結果に関して編集部としての意見を簡単に記して今回の企画を終えたいと思います。

まず現在の研究に取り組むに至る経緯に関しては、全体としてみれば歴史に関心を抱いてから大学院進学を決意をかためるに至るまでの過程が、学年が進むにしたがって順次段階を追って進んでいる人が多いようで、まあ予想通りと言ったところでしょう。注目の大学院への進学決意については、時期はほぼ予想通りでしたが、理由に関しては勉強・研究の継続の意欲とともに社会に出ることへの不安・不満あるいは実際に社会へ出てみて社会への不適合?を感じて、といった回答が見られ、大学院・院生生活の特殊性、社会との遊離という現状の一端が図らずも現れたという印象を受けました。現在の研究に関する諸項目では実にさまざまな回答が見られ、まとめて一言で何か言うのはちょっと無理かも知れません。あえて言えば、皆さんそれぞれに困難を抱えつつも、広い知的関心を持って研究に取り組まれている、というすばらしい?!院生像が浮び上がってきました。心強い限りです。生活全般に関する質問への回答からは、いま現在の経済的な状況から将来の就職の見通しに至るまで非常に厳しい現実に囲まれている院生たちの生活の実情がかなり如実に現れてしまいました。ある程度予想していたとはいえ、こうして実際に集計結果を見るとまた一段と暗くなってしまいそうです。ただ、周囲（とくに両親）の理解を受けて研究生活

を続けている院生が意外にも？多数を占め、院生間の交流も思いのほか活発であるようで、救いとなる明るい状況と言えましょう。

私たち編集部としての印象をごく簡単にまとめてみましたが、これ以外にも皆さんそれぞれにさまざまな印象・感想を持たれたのではないのでしょうか。このアンケートの結果を皆さんがそれぞれに自己認識・他者認識の材料としていただき、大学院あるいは大学院生について考えてみる際のたし（あるいは、ダシ?!）にしていただければ幸いです。今回のアンケートの内容はプライベートな部分あるいはそれ以外でもかなり微妙な問題に関わっていたうえに、質問の仕方がかなりぶしつけであったようで気分を害された方もいらっしゃると思われまます。用紙の回収中にも幾人かの方から忠告の言葉をいただきました。編集部として配慮が十分でなかったことをここにおわびいたします。最後になりましたが、ぶしつけな質問にもかかわらず、お忙しいなか回答を寄せてくださった院生の皆さん本当に有難うございました。

\*\*\*これまでの研究生活の中で、特に感銘(印象)を受けた書物・講義一覧

\*皆さんに多種多様な書物・講義を挙げていただきました。

「この本(講義)は確かによかったよなあ・・・」

「これそんなに面白かったかなあ？」

「ふうん。こんな本があるのかあ・・・」etc.

いろんな感想を抱きながらひとつずつ楽しんでご覧下さい。

☆順不同、・一個につき回答者一名

- ・ル・ロワ・ラデュリ「新しい歴史」
- ・野田宜雄「教義市民層からナチズムへ」、ウォーラステイン「史的システムとしての資本主義」、ヴェーバー「社会科学方法論」
- ・(講義---小谷汪之、安丸良夫)
- ・弓削達「ローマ皇帝礼拝とキリスト教徒迫害」
- ・ホイジンガ「中世の秋」
- ・(講義---澁塚忠躬「国民公会議員の運命」、近藤和彦「家族のスライド写真」)、ミユシャンブレッド「近代人の誕生」、G. Lefebvre, Napoléon
- ・和辻哲郎「古都巡礼」
- ・阿部謹也「ドイツ中世後期の世界」、(講義---川原栄峰「哲学B」)
- ・(講義---樺山紘一「史学概論」、城戸毅「学部ゼミ」)、ウィリアムズ「コロンブスからカストロまで」、越智武臣「近代英国の起源」、大塚久雄「近代欧州経済史序説」
- ・網野善彦・石井進ほか「中世の罪と罰」
- ・(講義---二宮宏之「比較史研究」)
- ・ホイジンガ「中世の秋」、北山茂夫・網野善彦・黒田日出男の著作
- ・坂口昂「世界に於ける希臘文明の潮流」
- ・ハーバード・ノーマン「クリオの顔」
- ・深谷克己「八右衛門・兵助・伴助」
- ・(講義---田村「古代ローマ史」)
- ・E. H. カー「歴史とは何か」、バラクラフ「歴史学の現在」、ヘルクハーン「軍国主義と政軍関係」
- ・丸山真男「現代政治の思想と行動」
- ・D. Herlihy et Ch. Klapisch-Zuber, *Les Toscans et leurs familles*
- ・宇佐見英治「雲と天人」、北田耕也「大衆文化を越えて---民衆文化への創造と社会教育」
- ・石母田正「中世的世界の形成」
- ・シュリーマン「古代への情熱」、今野國雄「史路遍歴」

- ・ (講演記録---山田欣吾)
- ・ 佐々木隆爾「世界史の中のアジアと日本」、広津和郎「松川裁判」
- ・ 今野國雄「修道院」
- ・ ファミリー版「世界と日本の歴史」
- ・ フーコー、アリエス、レヴィ・ストロース、ホイジンガ、ロラン・バルト、(講義---ジャン・グルニエの「犬の死について」の講読)
- ・ (講義---山之内靖の社会学講義、ドイツで行われた歴史学入門ゼミ)
- ・ (講義---吉田伸之「特殊講義」)
- ・ E. H. カー「歴史とは何か」
- ・ (講義---石橋秀雄「中国清朝史」、住谷一彦「社会思想史」)
- ・ 小谷汪之「共同体と近代」
- ・ ル・ロワ・ラデュリ、サザーン、マルク・ブロック
- ・ (講義---板垣雄三「ユダヤ人問題・東欧の民族問題」)
- ・ O. Brunner, *Land und Herrschaft*
- ・ M. Bloch, *Les rois thaumaturges*、ハーバーマス「公共性の構造転換」、ウーラー・ステイン「近代世界システム」
- ・ 森鷗外「渋江抽斎」、エリアス「宮廷社会」
- ・ (講義---近藤和彦('90年))、二宮宏之「全体を見る眼と歴史家たち」、高橋幸八郎「近代社会成立史論」
- ・ 田中克彦「ことばと国家」
- ・ アイク「ワイマル共和国史」
- ・ マルクス・アウレリウス
- ・ (講義---政治史)、塩野七生「チエーザレ・ホルジア・あるいは優雅なる冷酷」
- ・ 塚田孝「身分制社会と市民社会」、東条由記彦「製糸同盟の女工賃録制度」、子安宜郎「事件としての祖徠学」、B・アンダーソン「想像の共同体」、E・ラクラウ+Ch・ムフ「ヘゲモニーと社会主義戦略」、P・クラストル「国家に抗する社会」、大岡昇平「堺港攘夷始末」、柄谷行人「終焉をめぐる」、スピノザ・マルクス・フーコーの全テキスト
- ・ (講義---平川南「出土文字史料」)
- ・ R. Mandrou, *Introduction à la France moderne*, (講義---喜安朗)
- ・ 網野善彦「東と西の語る日本の歴史」、(講義---恒川恵一「政治学」)
- ・ 萩原龍夫「中世祭祀組織の研究」
- ・ P・フレイレ「伝達か対話か」
- ・ (講義---狩野正直)